

元気が湧いてくる活動を知った。東京都中央区に事務局を置くNPO法人「バイオ未来キッズ」の取り組みである。

企業や大学のバイオテクノロジーの世界で活躍してきた専門家が集まり、将来の日本を担う子供たちのために、と理科教育の改革に着手している。

子供たちに、自分の頭で考えることの大切さを理解させる。出前授業では、ヨーグルト作りの実験で微生物の働きを教えるなどの活動を展開中だ。

感動のカード式顕微鏡

同法人理事長の西山徹さんは味の素中央研究所長や同社副社長などを歴任した研究者。平成22年の退社後に、バイオ未来キッズを設立した。

現在、正会員は28人。中央研究所の先輩や後輩を中心に、大学の名誉教授らを迎えた顔ぶれ

論説委員 **日曜**に書く **長辻象平**

だ。平均年齢は70代前半で、豊富な知識と経験が光る。小学校への出前授業は5、6年生が対象だ。ヨーグルトを教材にしたのは、小学生が好む食品だからだ。

時の顕微鏡は複雑な形だが、東京工業大学名誉教授の永井和夫さんが工夫を重ね、シンプルな形で再現してのけた。

いかに創られたか(1200円+税)も、その趣旨に沿った生命科学の入門書。信州大学と中部大学で教授を務めた柴井博四郎さんが執筆し、味の素出身の今井孝夫さんが挿絵を担当したハードカバーの上製本だ。

争に一枚、かんでいる。『生物学はー』には、DNAの発見に至るまでの生命科学の研究史が概説されている。

教科書とは全く異なる優れた内容です」と話す。日本の理科教育に一石を投じる考えだ。

「バイオ未来キッズ」の元気

面白いのは、この後だ。児童各人に古典的な顕微鏡を手作りさせるのだ。

髪の毛の細部が見える。レーウエンフックが味わった感動と驚きの追体験だ。

ら説き起す構成だ。アリストテレスの認識は非科学的に映るだろうが、当時の博物学的知見に基づく厳密な検証から導かれた結論だったのだ。

バイオ未来キッズは、食育の大切さと日本の食文化を重視しており、親の世代向けに、代表的な発酵食品の味噌作り教室も開いている。

脳科学を援用した人工知能(AI)は、指数関数的な驚異の能力拡張を続けている。

人類が微生物の存在を知ったのは1670年代。オランダのレーウエンフックが単レンズの顕微鏡(倍率270倍)を作製したことで単細胞生物や細菌の存在が明らかになったのだ。

バイオ未来キッズの活動の特徴は、目には見えない微生物の世界を、科学教育の導入部になっている点にある。

自然発生の否定には長い年月を必要とした。パスツールによる実験で最終的な決着をみせたのは19世紀後半のことだった。

米国の中学校で使われている生物学の教科書の翻訳も完了、年内の出版を予定している。西山さんは「没個性的なわが国

21世紀は「生物学の時代」である。19世紀には化学、20世紀には物理学が発展し、人類社会を変えてきたが、今世紀は生命現象を扱う生物学が科学と技術の最前線を切り開いて進む。